

欲動の対象とメランコリー

藤 井 あゆみ

はじめに

1905 年、ジークムント・フロイト (1856–1939) は自らの著作『性理論のための三篇』第一版において「欲動 *Trieb*」という語を初めて用いた。このときはまだ欲動概念そのものにも欲動に密接に関わる「対象」の概念にも明確な定義は与えられていなかった。¹ 1915 年に発表された論稿「欲動と欲動運命」においてようやく「欲動」は次のように定義される。すなわち、欲動とは身体内部から発生して心へと到達する刺激の心的代表であり、心的なものと身体的なものの境界概念であると。² そして欲動の「対象」は以下のように規定されている。

欲動の対象とは、それを使って、あるいはそれを介して、欲動が目標に達することができるものである。対象は欲動に関わるもののうちでもっとも変動しやすいものであり、もともとその欲動に結びついているのではなく、充足を得るのに適しているために欲動に組み込まれるだけのものである。³

¹ ここでは「性の欲動 (性衝動) *Geschlechtstrieb*」が「人間や動物における性の欲求 *geschlechtliche Bedürfnisse bei Mensch und Tier*」であるという生物学的な想定が冒頭で述べられている。続いて「性対象 *Sexualobjekt*」と「性目標 *Sexualziel*」という用語が導入され、両概念は次のように区別されている。「性的な魅力のある人物を性対象と呼び、欲動がそこへ向かって突き動くところの行為を性目標と呼ぶことにしよう。」Freud, Sigmund: *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie* (1905). In: *Gesammelte Werke*, Bd. V. Hg. von Anna Freud et. al. London 1946, S. 34. 以下、*Gesammelte Werke*は *G. W.* と略記する。また、本稿における引用はすべて拙訳によるが、翻訳の際に日本語版フロイト全集を参照した。

² Vgl. Freud, Sigmund: *Triebe und Triebchicksale* (1915). In: *G. W.*, Bd. X, S. 214. 同年に出版された『性理論のための三篇』第三版においてもこれとほぼ同じ定義がなされている。Vgl. *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. 3. Aufl. (1915). In: *G. W.*, Bd. V, S. 67.

³ Freud, Sigmund: *Triebe und Triebchicksale* (1915). In: *G. W.*, Bd. X, S. 215.

ここにおいてフロイトは欲動の「対象」が欲動の「目標」である「充足」⁴のための偶発的手段にすぎず、きわめて可変的なものであることを明らかにした。すなわち、性的な魅力を放つ特別な対象を目の前にすることで欲動が生じるのではなく、身体内部から生じた刺激（欲動）を除去するための手段として対象は必要となるということである。

また当論稿では、上述のような欲動を満たすと顧みられなくなる「欲動の対象」と欲動を向け続けることができる「愛の対象」とのあいだに区別が設けられている。フロイトの性理論では、欲動は幼児期にはまだ部分的なものであり、思春期になって初めて性器のもとに統合され、異性間の性交渉が成立するのだが、「愛している」という語はこのときになってようやく自我と対象との関係に適用されるようになる。⁵したがって、乳房や髪などは「欲動の対象」となりうるが、「愛の対象」とは呼べない。「愛の対象」とは人物全体を指す言葉なのである。

さらにフロイトは性器的な結び付き以前の「愛」の段階があることを語っている。すなわちそれは性欲動（リビード）の発達の第一段階である口唇期のことを指している。⁶口唇期とは乳児が口で母親の乳を吸うことによって快を得る段階であり、この段階における自我と対象との最初の関係はアンビヴァレントなものである。口唇期の欲動の目標は、対象を「体内化すること *Einverleiben*、あるいは貪り食うこと *Fressen*」である。⁷

このような「体内化」については、「欲動と欲動運命」と同年に執筆され、その2年後の1917年に発表された「喪とメランコリー」で再度取り上げられる。ここではメランコリー患者が対象を体内化する機制が詳述されているが、フロイトはさらに6年後（1923年）にこの体内化の機制を考察し直し、「欲動の対象」が自我の性格形成に寄与する重要な概念であることに気付くことになる。⁸すなわち、メランコリーにおける「体内化」の問題が対象概念にとって決定的な意味を持つようになるのである。

メランコリーにおいて「体内化」が大きな役割を果たしているということを1915年3月31日付の手紙ですでにフロイトに指摘していたのは、⁹フロイトの愛弟子カール・ア

⁴ 欲動の「充足」は、身体的な源泉から生み出される刺激を除去し、快を得ることである。Vgl. ebd., S. 215.

⁵ Vgl. ebd., S. 230.

⁶ 愛の前段階には、口唇期以外に肛門サディズム期もあるがここでは口唇期に的を絞ることとする。

⁷ Vgl. ebd., S. 231.

⁸ Vgl. Freud, Sigmund: *Das Ich und das Es* (1923). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 256f.

⁹ Vgl. Freud, Sigmund / Abraham, Karl: Sigmund Freud / Karl Abraham Briefe 1907-1926. Hg.

ブラハム（1877－1925）であった。彼はこの体内化の問題を掘り下げることで、欲動の発達と対象愛の発達との関係性を「心的障害の精神分析に基づくリビード発達史の試み」（1924）において明らかにした。

本稿ではまず、フロイトとアブラハムがメランコリーの機制を考究することによって、「対象」という概念がその重みを増すことになったことに注目する。この概念の変遷を跡付けることで彼らの理論における対象関係の問題を浮き彫りにすることが可能となるだろう。そして 1920 年の著作『快原理の彼岸』に初出するフロイトの重要概念「死の欲動（破壊欲動）」とその対象となる自我の問題に目を向けるとき、またしてもそこでメランコリーの機制が一つの契機となり、この問題がフロイト晩年の文化論へとつながっていくと考えられる。死の欲動とその対象の問題がメランコリーの機制に対するフロイトの洞察を通じて、その文化論へと至る道筋を明示することが本稿の最終的な目論見である。

1. フロイトのメランコリー論における体内化ないし同一化の問題

1917 年の論稿「喪とメランコリー」でフロイトは「取り込み *Introjektion*」と「同一化 *Identifizierung*」およびその身体的原型である「体内化」の機制について論じている。メランコリー患者は、愛する対象を喪失すると、対象へ向けていたリビードを自我に引き戻す。その際、自我は対象の表象を自らに取り込んでそれと同一化する。そしてこの同一化により、患者は喪失した愛の対象を自我の中に再建して対象愛の代理を作り上げる。このような対象愛の代理を作り出す同一化のことをフロイトは「ナルシシズム的同一化」と呼んだ。フロイトはこの同一化の機制を以下のように述べている。

その機制〔対象愛の代理になるナルシシズム的同一化〕は、当然のことながら、対象選択〔愛する人物を選び出すこと〕から根源的なナルシシズムへの退行に対応している。……同一化は、対象選択の前段階であり、また、対象を選択する際の表現としてはアンビヴァレントな最初の方法である。それは自我が一つの対象を際立たせるようなものなのである。自我はこの対象を体内化することを欲する。詳しく言うと、リビードの発達段階の口唇期ないし食人期にふさわしく、貪り食うという方法で。¹⁰

von Hilda C. Abraham / Ernst L. Freud. Frankfurt am Main 1965, S. 206-209.

¹⁰ Freud, Sigmund: Trauer und Melancholie (1917 [1915]). In: *G. W.*, Bd. X, S. 436.

ここで触れられている口唇期とは、リビード¹¹の発達段階の第一段階で、性的快感が食物摂取に伴う口腔と口唇の刺激に結びついている段階である。乳児は口で母親の乳を吸うことによって空腹を満たすのと同時に性的な快を得るのである。この段階においては、欲動の対象を体内化することが目標とされるが、対象を体内化することは対象の存在を破棄してしまうことと表裏一体であるため、アンビヴァレントなものである。

メランコリーにおいて観察されたこのような体内化ないし同一化の問題は、1921年の著作『集団心理学と自我分析』で改めて取り上げられる。ここでは、自我が断念した対象を取り込んで変容するものがメランコリーにおける同一化であることが述べられ、これは、他の同一化、たとえば幼児が父親を理想として模倣する最初期の同一化や、ヒステリー患者に見られるような部分的同一化（父親の咳込みを真似るなど）とは区別されている。¹²

さらにその2年後の著作『自我とエス』においてこの問題は論じ直されている。ここでフロイトは「喪とメランコリー」の論稿を振り返り、当時はメランコリーにおける同一化の過程の十全な意義、すなわちこの同一化が自我の性格形成にかかわっているということを自覚していなかったと自省した。そして次のように推察したのである。メランコリーの場合と同じく自我を変容させる同一化の過程は、幼児の成長段階において頻繁に起こるものであり、自我の性格というものはかつて断念された「対象備給」、つまり対象に結び付けられていたリビードが沈殿したものである、と。当然、その沈殿物には対象選択の歴史が刻まれているということになる。¹³

たとえば、恋愛経験豊富な女性の性格のうちに対象備給の残留物が容易に見られるとフ

¹¹ 1910年の論稿「心因性視覚障害の精神分析的理解」において初めてフロイトは「自我欲動」ないし「自己保存欲動」と「性欲動」との対立を想定した。前者は生存のために自分を守ろうとするものであり、その名の通りこれは自我（自己保存）に関する欲動である。後者は性的満足を得ようとするものであり、こちらは性的対象に関わるものである。ここではわかりやすく「自我欲動」と「性欲動」の対立は「飢え」と「愛」の対立として描き出されている。Vgl. Freud, Sigmund: *Die psychogene Sehstörung in psychoanalytischer Auffassung* (1910). In: *G. W.*, Bd. VIII, S. 97f. そして1915年の『性理論のための三篇』第三版で性欲動のエネルギーであるリビードが量的な概念として規定された。ここでフロイトは、自我の中に納まっている、あるいは自我に向けられているリビードを自我リビードないしナルシズムのリビードと呼び、対象へ向けられているリビードを対象リビードと呼んだ。Vgl. *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. 3. Aufl. (1915). In: *G. W.*, Bd. V, S. 118f.

¹² Vgl. Freud, Sigmund: *Massenpsychologie und Ich-Analyse* (1921). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 115-121. .

¹³ Vgl. Freud, Sigmund: *Das Ich und das Es* (1923). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 256f.

フロイトは述べている。つまり、彼女の性格からは、これまでに付き合ってきた男性たちの特徴がすぐに見て取れるということである。ただし、自我には断念した対象がすべてまるまる沈殿しているわけではない。自我は対象からの影響に対する耐性をだんだんと身に着けるようになるのである。¹⁴

しかし、この耐性がどう形成されようと、幼児期初期に生じた同一化の影響は広範かつ持続的なものになる。フロイトによれば、この同一化が自我理想（超自我）の発生にも深く関わっていることになる。すなわち、自我理想の背後には個人の最初の同一化、父との無媒介的な同一化が潜んでいるのである。¹⁵

男児は父親を理想とし、父親を模倣して自らの自我を形成しようとする。これと同時にあるいはそれ以前に男児は母親を愛の対象として選択しているため、母親への対象備給と父親への同一化が併存することになる。そして母親への性的欲望のほう徐徐に強くなり、父親が次第に邪魔になる。こうしてエディプスコンプレックスが発生することになる。父同一化は敵対的な色合いを帯び、父親に取って代わりたいという欲望を男児は抱く。これ以後の男児の父親に対する関係はアンビヴァレントなものになり、そもそも同一化に含まれていたアンビヴァレンツがはっきりと表出される。そして男児はこのようなエディプスの欲望（父を殺して母を娶りたいという欲望）を抑圧するために、逆説的にも自分より強大な父親との同一化を強化する。しかし父と同一化したからといって父を打ち倒すことはできないので、エディプスコンプレックスは瓦解し、母親に対する対象備給は断念せざるを得なくなる。¹⁶

『自我とエス』で提示されたこのような父との無媒介的な同一化は、「喪とメランコリー」で考察された、断念した対象を自我に導き入れる同一化とは異なっている。フロイトの分析によると、断念した対象との同一化はじつは女兒の場合によく見られる。女兒は愛の対象として父親を断念せねばなくなると、母親とではなく父親と同一化する。すなわち喪失した対象と同一化するのだ。しかしながらこれはその女兒に男性的素質が女性的素質よりも強く備わっているからであり、男児でも女性的素質が強い場合は父に対して情

¹⁴ Vgl. ebd., S. 257f.

¹⁵ 自我理想に関する詳しい考察は以下の文献を参照。松山あゆみ「自我理想の起源—フロイトにおけるメランコリーと同一化の問題」：京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第7号、2011年、45～62頁。

¹⁶ Vgl. Freud (1923), S. 260.

愛的な女性的態度を示し、母には敵対的に振る舞う。¹⁷

こうに男児も女児もじつは両性を兼ね備えており、エディプス的狀況が父との同一化か母との同一化のどちらかで終わるかは、男性性と女性性のどちらの素質が強いにかかっているのである。つまりここでは四種類の同一化（原初的な父同一化、断念した母との同一化、原初的な母同一化、断念した父との同一化）が問題とされており、これらの同一化が差引合算されて一本化されたものが父同一化あるいは母同一化という形で現れる。「こうして〔同一化によって〕生じた自我変容は、特権的地位を保ち、自我理想ないし超自我としてそれ以外の自我と対峙することになる。」¹⁸ 超自我は自我を制御するという能力を一生涯持ち続け、成熟した自我に対して支配権をふるい続けるのである。親が子供に言うことを聞かせるのと同じように。¹⁹

『自我とエス』における同一化の考察を検討することで明らかになったのは、欲動の対象を取り込んで成し遂げられる同一化およびその原型である体内化が自我形成と自我理想ないし超自我の発生に深く関わっているということである。1915年の論稿「欲動と欲動運命」では、体内化という概念には触れられているものの、それは愛の前段階としか見なされておらず、「欲動の対象」が自我の性格形成および自我理想の発生に大きな役割を果たしていることについてはまったく語られていなかった。「欲動の対象」は、メランコリー論を通じて、人格形成にまで、つまり自我の心的構造にまで影響を及ぼすような重要な概念として位置づけられるようになったと言えるだろう。²⁰

しかしながら、メランコリーにおける同一化の過程が人間の人格形成に関わるものとしてこのように一般化されてしまったら、メランコリーという病の独自性はいったいどこに見出せるのだろうか。フロイトは『自我とエス』（1923）において、その3年前の著作『快原理の彼岸』で新たに導入した「死の欲動 Todestriebe」²¹ という概念を用い、メランコ

¹⁷ Vgl. ebd., S. 260f.

¹⁸ Ebd., S. 262.

¹⁹ Vgl. ebd., S. 277f.

²⁰ この点に関しては、対象関係モデルの提唱者であるグリーンバーグとミッチェルがすでに指摘している。Greenberg, Jay R. / Mitchell, Stephen A.: *Object Relations in Psychoanalytic Theory*. Cambridge / Massachusetts / London 1983, p.71.

²¹ 1920年の『快原理の彼岸』においてフロイトは自らの欲動二元論を修正し、「生の欲動 *Lebenstribe*」と「死の欲動 *Todestriebe*」の対立を仮定した。「生の欲動」は、これまでフロイトの二元論を形成してきた「性欲動」と「自我欲動ないし自己保存欲動」を内包する概念であり、エロースとも呼ばれる。これに新たに「死の欲動」が対置されたのである。これは、死を目標にし、無機的

リーの状態を次のように説明したため、その病の独自性を失わずに済んだ。すなわち、この状態においては、超自我が死の欲動の一種の集積場のようなものになり、それが自我を責めさいなんで最終的に死へと駆り立てるのである。²² ここではこれ以上、「死の欲動」の対象とメランコリーの問題に立ち入らず、第三節で改めて論じることにし、次節では先にアブラハムの論稿を取り上げることにしたい。というのも、彼は「死の欲動」ないし「破壊欲動」というフロイトの術語は使用していないものの、メランコリー患者の対象愛における攻撃性の問題を強調したからである。

2. アブラハムのメランコリー論におけるリビード発達と対象愛の問題

アブラハムは、メランコリーにおける食人的体内化の重要性を 1915 年の段階ですでに文通によってフロイトに示唆していた。また彼はフロイトに先んじて、メランコリーに関する論稿「躁鬱病およびそれに類似した状態の精神分析的研究と治療の端緒」を 1912 年に発表している。とは言え、この論稿では、強迫神経症とメランコリーの比較がなされているだけで体内化の問題にはまだ触れられていない。²³

1915 年にすでにメランコリーにおける体内化に着目していたにもかかわらず、彼は自らの論稿でその問題を取り上げるまでおよそ 10 年という長い歳月を要した。その論稿とは 1924 年の「心的障害の精神分析に基づくリビード発達史の試み」である。ここにおいてアブラハムは、メランコリー患者に見られる体内化の問題を掘り下げることにより、フロイトが想定したリビード発達段階をさらに細分化し、この発達段階と対象愛との関係を明らかにしたのである。以下にその図式を再録するが、一見して明らかなように、この図式は、リビードが原初的なものから発達していく様子を、下位から上位へ向かって示したものである。²⁴

世界の休息に帰還しようとするものである。

²² Vgl. Freud (1923), S. 283-287.

²³ Abraham, Karl: Ansätze zur psychoanalytischen Erforschung und Behandlung des manisch-depressiven Irreseins und verwandter Zustände (1912). In: Psychoanalytische Studien II. Hg. von Johannes Cremerius. Frankfurt am Main 1971. この論稿は、1911 年 9 月 21 日にヴァイマルで開催された第三回精神分析会議における講演「抑鬱状態および興奮状態の心的性的基盤」に基づいたものである。

²⁴ Abraham, Karl: Versuch einer Entwicklungsgeschichte der Libido auf Grund der Psychoanalyse seelischer Störungen (1924). In: Psychoanalytische Studien I. Hg. von Johannes Cremerius. Frankfurt am Main 1969, S. 179.

リビードの編成段階	対象愛の発達段階	
6. 性器期の最終期	対象愛	アンビヴァレント (両価性以後)
5. 性器期前期 (男根期)	性器を除外した対象愛	アンビヴァレント 両 価 的
4. 肛門サディズム期後期	部分的対象愛	
3. 肛門サディズム期前期	体内化を伴う部分的対象愛	
2. 口唇期後期 (食人期)	ナルシズム 対象の全面的体内化	アンビヴァレント (両 価 性 以 前)
1. 口唇期前期 (吸引期)	自体性愛 (対象なし)	

通常、人は乳幼児期から思春期へと心身ともに発達していくが、それに対応してリビードも第一段階から順に発達する。第一段階の口唇期前期 (吸引期) は、乳児が母親の乳房を吸う段階で、性的快感が口唇域に結びついている。乳児は乳房を吸うことで快を得るのである。この段階では乳児は自らと対象との区別がつかない状態である。第二段階の口唇期後期 (食人期) も性的快感は口唇領域と結びついているのだが、この時期には乳児の歯が発育し、噛む活動が特徴的になる。吸う活動においては、対象はなくならないが、噛む活動は対象を破壊して体内化する。第三段階の肛門サディズム期前期は、肛門領域が性源域 (一般にいう性感帯) となる。この時期では糞便と対象が象徴的に同一視され、排泄が対象の破壊と結びつく。第四段階の肛門サディズム期後期では、対象は保持される。対象保持は便秘と同一視され、所有欲と結びつく。第五段階の性器期前期 (男根期) においてリビードは性器に集中するが、男児も女児も突起物として目につく男性性器しか知らず、両性の対立は男根所有者と被去勢者の対立に等しい。第六段階の性器期の最終期は、リビードが性器に集中して異性との性器の結合を目指した生殖機能に奉仕する段階である。これは思春期に相当し、対象愛は異性間の性的な営みと一致するようになる。

アブラハムは、フロイトの論じた三つのリビード編成段階 (口唇期、肛門期、性器期) を補足して細分化し、六つの区分を設けた。この新たな区分を設けたことにより、対象に対するリビードのアンビヴァレントな態勢が強調されることになった。口唇期前期 (吸引期) から後期 (食人期) への移行の際に、乳児の葛藤のないアンビヴァレント以前の態勢は対象敵対的なアンビヴァレントな態勢に移行する。そして肛門サディズム期の前期から後期へと向かう歩みは対象の破壊から愛護への移行を意味する。性器期にはついにアンビヴァレン

ツが克服され、対象との性的な営みが可能となる。このように支配的な性源域が段階的に移り変わっていくことは対象愛の達成にとってきわめて重要なのである。²⁵

精神分析理論においてそれまで漠然としか述べられてこなかった個人と対象世界との関係、つまり対象関係の意義を、アブラハムは当該のメランコリー論（1924）においてははっきりと指摘したのである。そしてメランコリー患者の対象への愛、つまりリビードが退行する先を以下のように明示した。「メランコリー患者における対象愛の能力はとりわけ未熟に形成されているため、罹患した場合、対象の食人的体内化の傾向が強くなるが、これは上の図式の第二段階〔口唇期後期〕へと患者のリビードが退行するのとは一致する。」²⁶ すなわちナルシシズム的疾患であるメランコリーにおいては、患者の自我は外界の対象を食人的に取り込んで内界だけでその対象関係を成り立たせようとするのである。メランコリーに見られる食人期へのリビードの退行は、アブラハムが観察した臨床的「事実」から、すなわちメランコリー患者が嘔んだり貪り食ったりする空想を抱くことから証明されている。²⁷

また彼はメランコリー患者の対象喪失の状態にも着目し、次のように考察した。ここでいう対象喪失とは、フロイトがすでに「喪とメランコリー」で述べていた、愛する対象から傷つけられたり、幻滅させられたりすることにより、その対象を断念することであるが、アブラハムはメランコリー患者の分析を通して、患者が空想において対象喪失を糞便の排泄と等置していることを明らかにした。このことは患者のリビードが肛門サディズム期前期に退行していることを示し、対象の破壊を意味している。そして患者は、排泄した対象を食人的に「再体内化 *Wiedereinverleibung*」する。フロイトにおいては「ナルシシズム的同一化」と呼ばれていたものをアブラハムは「再体内化」と言い換えたのである。アブラハムが体内化の前に「再」をつけて強調したのは、その患者に糞便を食べるという強迫的な空想が見られたことから、一度糞便として排泄した対象を再度食人的に摂取するという考えに至ったからである。したがって、メランコリー患者のリビードは、まずは肛門サディズム期前期に退行し、そこに留まらず、さらに口唇期後期にまで退行するというこ

²⁵ Vgl. ebd., S. 142.

²⁶ Ebd., S. 180.

²⁷ Vgl. ebd., S. 139.

になる。²⁸

肛門や口唇における対象へのこのような攻撃的反応には、メランコリー患者のサディズムないし破壊的衝動が顕著に現れている。しかしながらアブラハムは、メランコリーに見られる攻撃性と、先に触れたフロイトの概念である「死の欲動」ないし「破壊欲動」とを結び付けることはなかった。当時すでに分析家たちのあいだで物議を醸していたこの概念を彼は扱いきれなかったのかもしれない。²⁹ アブラハムは当論稿を発表した翌年（1925年）にこの世を去り、彼の理論は彼の死の間際までその教育分析を受けていたメラニー・クライン（1882－1960）へと引き継がれていった。彼女は1935年の論稿「躁鬱状態の心因論に関する寄与」³⁰でメランコリーにおける破壊欲動の問題に真っ向から取り組むことになるのである。しかしながら本稿では、フロイトに立ち戻り、アブラハムには扱われることのなかったメランコリーにおける「死の欲動（破壊欲動）」とその対象の問題へと踏み出したい。

3. メランコリーにおける死の欲動の対象

フロイトが「死の欲動の対象」を明示しているのは、管見の限りではあるが、『自我とエス』（1923）における次の箇所だけである。「自我は、同一化と昇華の作業によってリビードを制覇するためにエスの中の死の欲動を援助するのだが、その際、死の欲動の対象になつて自らが死んでしまう危険に陥る。」³¹

ここで「エス」という語が挙げられているが、この語はフロイトが『自我とエス』で初めて取り上げた概念であり、「エス」は欲動エネルギーの大貯蔵庫だとされている。³² フロイトの見解では、ここから対象へと繰り出されるリビードが自我に戻ってナルシズム的リビードとなり、このとき達成される同一化がメランコリーにおいて見られた「ナルシズム的同一化」である。対象リビードからナルシズム的リビードへ転化する際には、

²⁸ Vgl. ebd., S. 134－138.

²⁹ ピーター・ゲイ『フロイト』第2巻（鈴木晶訳、みすず書房 2004年）、483頁参照。

³⁰ Klein, Melanie: A Contribution to the Psychogenesis of Manic - Depressive States (1935). In: The Writing of Melanie Klein, vol. I. Ed. Roger Money - Kyrle. New York 1975.

³¹ Freud (1923), S. 287. 傍点は筆者による強調。

³² Vgl. ebd., S. 275.

性目標の断念ないしは脱性化が伴っており、フロイトはこのことを「昇華 *Sublimierung*」と呼んだ。³³

上述の引用箇所述べられていることは、フロイトの論述に従って言い換えればこういうことである。自我は、対象リビードを制圧し、自らを愛の対象としてエスに押し付けるが、その際、リビードを昇華してエロースの意図を妨げるため、エロースとは反対の欲動の動き、つまり「死の欲動」に脱性化されたリビードは付加されることになり、自ら死を招いてしまう。³⁴ フロイトによると、この危険から逃れるために、自我は自らをリビードで満たさなければならなくなり、生きて愛されることを欲するようになる。というのも、死の欲動はエロース成分（リビード）と混合し調和が取れている限りは無害なものだからである。³⁵ あるいは、死の欲動を攻撃という形で外界に逸らすことで自死の危険から逃れられるが、死の欲動の大部分は内部で働き続けることになる。³⁶

同一化が達成されて昇華されたリビードが死の欲動に加算され、さらにそれをエロース的成分で調和することもできず、外界に逸らすこともできないとき、自我は死の欲動の格好の餌食となる。これがメランコリーの状態だと言えるだろう。というのもフロイト曰く、メランコリーでは超自我の中で「死の欲動の純粹培養（eine Reinkultur des Todestriebes）」³⁷ のような状態が生み出され、超自我は「死の欲動の一種の集積場（eine Art Sammelstätte der Todestriebe）」³⁸ のようなものになるからである。この場合、自我が事前に身を守るように躁に転化しない限り、超自我は往々にして自我を死に駆り立てる。両親との同一化を出自とする超自我が自我を死に追いやるということは、親の子殺しという残酷な事態と同じだと言えよう。もっと言えば、超自我が存在するからメランコリーに罹患する可能性があるものであり、逆に、超自我がなければ自我はメランコリーに陥らずに済むのである。

ここで疑問に思われるのは、フロイトによるとエロース成分の助けがない限り、内界で

³³ Vgl. ebd., S. 259. 「昇華」という概念にフロイトはすでに 1908 年の論稿「『文化的』性道徳と現代の神経質症」で言及している。そこでは、性的目標を、性的ではない他の目標と置き換えることができる能力が昇華であると述べられている。Vgl. Freud, Sigmund: Die „kulturelle“ Sexualmoral und die moderne Nervosität (1908). In: *G. W.*, Bd. VII, S. 150.

³⁴ Vgl. Freud (1923), S. 274f.

³⁵ Vgl. ebd., S. 284-287.

³⁶ Vgl. ebd., S. 284.

³⁷ Ebd., S. 283.

³⁸ Ebd., S. 284.

沈黙しているはずの死の欲動が、メランコリーにおいては激しい批判を自我に向け、非常に雄弁になっていることである。超自我のなかで純粹培養された死の欲動は、いかにして自我を責めさいなむことができるのだろうか。もしかしたら自我のマゾヒズムが協働し、超自我に懲罰を要求しているということも可能性としては考えられるのかもしれない。しかし、この問題についてはまた稿を改めて論じたい。

ただし、なぜ超自我が死の欲動の集積場のようになるのかということに関しては、フロイトはこう答えている。欲動を制限するからだ。人間は外界に対する攻撃性を制限すればするほど、超自我において厳格になり、自我に対して攻撃的になるのである。³⁹ この問題は引き続き、1930年の著作『文化における居心地悪さ』において取り上げられている。

4. 文化における死の欲動と同一化

フロイトのこの文化論における「文化」とは、複数の個人、家族、さらに部族や民族、国を大きな一つの単位、つまり人類へとまとめあげていこうとするエロースに従属する過程のことである。人間集団をリビードによって互いに結び付けるのはエロースの働きなのだが、これに抗うのが人間の自然な攻撃欲動ないし破壊欲動（死の欲動）である。ゆえに文化の発展は生の欲動と死の欲動のあいだの闘いということになる。⁴⁰ では、個人の自然な攻撃欲動を無害にするためにはどういった手段が講じられているのだろうか。

フロイトによって用意された答えはいとも簡単である。攻撃性をそれがもとあった場所、つまり自我へと引き戻し、内面化することで外界への攻撃を抑える、これである。より詳しく言うところなる。エディプスコンプレックスにおいては攻撃したくとも強大すぎて歯が立たない権威（父）を自分に取り込んで同一化し、権威は超自我となるが、子供がこの権威にもともと向けたかった攻撃性は結局自らの超自我のうちにすべて保持されることになる。超自我（良心）は欲動断念の帰結であると同時に、その後の外界への攻撃欲動を断念するよう、自我を監視する審級（Instanz）となる。ゆえに超自我に本来的に備わっている厳格さは、父親に厳しくされた経験に由来するものではなく、むしろ自分が父親に抱いていた攻撃性の強さの表れなのである。⁴¹

³⁹ Vgl. ebd., S. 284.

⁴⁰ Vgl. Freud, Sigmund: *Das Unbehagen in der Kultur* (1930 [1929]). In: *G. W.*, Bd. XIV, S. 480f.

⁴¹ Vgl. ebd., S. 482-489.

さらにフロイトは『トーテムとタブー』(1913)で自身が考え出した「神話」⁴²を『文化における居心地悪さ』(1930)において再び取り上げ、父に対する攻撃性の起源とそこから生まれた罪責感について論述している。その神話とは原父殺害の神話である。すなわち、女たちを独り占めにした暴力的な原父を兄弟たちで殴り殺し食べつくしたというものである。彼らは原父を殺害することにより攻撃欲動を満足させた。

しかしながら、この原父は、彼らにとって、羨望されるとともに畏怖される模範像でもあった。彼らは父を憎んでもいたが、愛してもいたのである。彼らが父を殺害したあと、父に対する愛の側面が彼らの前面に現れ、それは後悔となって罪責感をもたらす。この後悔は彼らの父に対する原初的な感情のアンビヴァレンツだった。そして父との同一化によって超自我を打ち立て、父に発した攻撃欲動の懲罰として、この超自我に父と同じ機能を与え、二度とこのようなことが起こらぬようにしたのである。父に対する攻撃欲動は後の世代にも繰り返し現れるが、罪責感もそのまま存在し続ける。それゆえこの攻撃欲動は押さえつけられて、超自我に転移されるたびに罪責感は増大していく。この罪責感はエロースと破壊欲動ないし死の欲動との永遠の闘いであるアンビヴァレントな葛藤の表現なのである。⁴³そしてこの罪責感が極めて強くなり、自責の形をとって現われるのがメランコリーである。

こうして自我の攻撃性は、超自我の監視下に置かれ、罪責感に縛られ、外界へ野放しに放散されることはなくなった。すると今度は、攻撃欲動を満足させずにいることで自我の攻撃性は超自我に引き受けられ、超自我の自我への攻撃性も増大していく。これでは文化や共同体は保たれたとしても、個人がみなメランコリー患者になって死滅してしまい、何のために欲動を制限してきたのかわからなくなってしまう。もちろんこれは極論にすぎないが、同じような話は「続・精神分析入門講義」(1933)や「精神分析概説」(1940)などのフロイトの晩年の諸作品でなされており、いずれにおいても攻撃性を内界にため込むことは、不健康であり、自己破壊へ向かうことであるということが指摘されている。⁴⁴

そして「精神分析概説」では自らを慰めるかのような文言が後に続く。「幸いなことに、攻撃欲動は決して単独では存在せず、つねにエロース的欲動と合金のように混ざり合っ

⁴² Vgl. Freud, Sigmund: *Totem und Taboo* (1913 [1912-1913]). In: *G. W.*, Bd. IX, S. 176f.

⁴³ Vgl. Freud (1930 [1929]). S. 492.

⁴⁴ Vgl. Freud, Sigmund: *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1933 [1932]). In: *G. W.*, Bd. XV, S. 118. Abriß der Psychoanalyse (1940 [1938]). In: *G. W.*, Bd. XVII, S. 72.

いるのです。このエロース的欲動は、人間によって生み出された文化という条件のもとで、様々なことを和らげなければならず、また防止せねばならないのです。」⁴⁵ すなわち、結合を目標とするエロースが、解体を目標とする攻撃欲動（破壊欲動）とつねに混合しているため、自己破壊から死へと至る最悪の事態を招かずに済むということである。

しかしながら、フロイトの見解に基づく、エロースのエネルギーであるリビードが枯渇した場合には、破壊欲動が猛威を振るい、自らを死に至らしめるということになるのだから、メランコリー患者は死へと向かうしかなくなるのではないだろうか。こういったことを避けるには、リビードを産出し続けねばならない。リビードには身体的源泉があり、そこからリビードは自我へと流れ込むのだが、⁴⁶ いかにしてリビードを増量させるのかという具体的な方策については、フロイトは何も語っていない。リビードを量的に捉えてその増減を量る経済論的見地に立てば、自らのリビードが不足した場合、対象から奪うことによってそれを補うことができると考えられるだろう。これを一般的な言葉で言い換えると、「愛されている」ということである。⁴⁷ 対象からのリビード備給を仮定するなら、人はつねに誰かから愛されることによって破壊欲動から身を守り、自己を破壊せずに済みそうである。それでは、人がみな相思相愛になればエロースと破壊欲動とのバランスが保たれ、共同体は何の不安もなく平和なものになるのだろうか。いや、心中や集団自殺というものを考慮に入ると、この想定はやすやすと崩れてしまう。つまるところ、経済論的欲動を捉えてみても整合性の取れない事態が現実にはあふれているのである。

経済論とは別の観点、すなわち昇華の観点から欲動を見てみてはどうだろうか。フロイトは性欲動ないしエロースの昇華を仮定したが、破壊欲動（死の欲動）の昇華には積極的には触れなかった。破壊欲動は昇華できるかという問いは、マリー・ボナパルト（1882－1962）がすでに1937年に私信でフロイトに投げかけていたものである。この問いに対し、フロイトは、破壊欲動がエロースとの混合によって部分的にしか昇華できないという主旨の答えを彼女に返している。⁴⁸ フロイトは破壊欲動（死の欲動）そのものの昇華については考えていなかったということがこのやり取りからうかがえる。死の欲動が純粋培養され

⁴⁵ Freud (1933 [1932]), S. 118.

⁴⁶ Vgl. Freud (1940 [1938]), S. 73.

⁴⁷ 愛することが自己感情を低下させ、愛されることがそれを再び高めるという記述が1914年の論稿「ナルシシズムの導入に向けて」に見られる。Vgl. Freud (1914), S. 167.

⁴⁸ 松山、前掲論文参照。

るような状態をメランコリーという病の中に見出したフロイトが、その処方箋となるかもしれない昇華の問題を追及しなかったのは謎である。とは言え、それがフロイトに対するものねだりであるのも確かである。これは精神分析理論を研究対象としている者が引き継いで考察していかねばならない問題ではないだろうか。

おわりに

本稿では、フロイトの欲動論への考察を通じて、そこに果たす彼のメランコリー論の意義に着目することで、「欲動の対象」の位置付けにフロイトの理論的深化の過程において重要な変更が加えられていることを示してきた。1915年の論稿「欲動と欲動運命」では、欲動の充足のためのたんなる偶発的手段でしかなかった「欲動の対象」という概念は、1923年の著作『自我とエス』において自我形成および自我理想ないし超自我の発生に深く関わる重要な概念に変貌したのである。その変貌の契機となったのがフロイト自身のメランコリー論「喪とメランコリー」(1917)であった。そこでは、メランコリー患者は愛の対象を断念した際にその対象を同一化(体内化)すると述べられており、『自我とエス』(1923)では、このメランコリーの機制を振り返ってこうした同一化には自我変容という事態が随伴していることが指摘された。このような自我変容が自我の性格を形成し、その最初のもの、すなわち両親との同一化によって変容した部分が自我理想ないし超自我となってそれ以外の自我に対峙するようになるのである。ここにおいて「欲動の対象」に人間存在の基盤を形成するという、極めて重大な意義が付与されることとなった。

フロイトのこうした見解に対し、アブラハムは1924年の論稿「心的障害の精神分析に基づくリビド発達史の試み」でメランコリーにおける対象愛の未熟さからくる攻撃性の問題を取り上げた。彼によれば、メランコリー患者のリビドは、まず肛門サディズム期前期に退行し、患者は対象喪失を糞便の排泄と等置するとされている。こうした思考過程が意味しているものは対象の破壊である。この退行したリビドは、さらに前の段階である口唇期後期(食人期)に退行し、対象を食人的に体内化するのである。メランコリー患者に見出されたこのような攻撃性の問題を、アブラハムは、フロイトが1920年に『快原理の彼岸』において導入した「死の欲動」という概念と関係付けて論じはしなかった。しかしこの思想的連関は、アブラハムが教育分析を行っていたクラインに引き継がれていくことになる。

フロイトは『快原理の彼岸』において「死の欲動の対象」がいかなるものであるかを明確に定義することはなかった。しかし、その3年後の著作『自我とエス』(1923)の中には「死の欲動の対象」という記述が現れており、そこで問題となるのもまたメランコリーなのである。メランコリー患者の超自我の中では、死の欲動が純粹培養されて、超自我がその集積場のようなものになっており、自我を責めさいなむことになる。こういった事態が出来するのは、共同体のなかでは人々は欲動を制限しなければならないからである。人間は欲動を制限し、外界への攻撃性を内面に向けることで自己破壊的傾向を強めていくことになる。

メランコリーをきっかけとしてフロイトに開示された死の欲動の対象の問題は、彼の文化論『文化における居心地悪さ』(1930)へと通じているのである。翻ってみるに、「欲動の対象」の問題から「死の欲動」を経てその独自の文化論の構築に至るまでフロイトの理論的發展を促したものの一つは、メランコリーであったと言えはしないだろうか。生であれ死であれ、また愛であれ憎しみであれ、欲動の対象をフロイトが語るとき、そこにはつねにメランコリーの機制が働いているのである。